

科学技術は実利のためだけなのか

学 長 大橋 秀雄



吹雪が吹き荒れたあとは、空が驚くほど清澄となる。それが昼間だったら、紺碧の天空と白銀の大地が眩しいコントラストを描き出すし、それが夜だったら、暗黒の空一面を無数の星が隙間なく埋め尽くす。

高校生のころは、吹雪のあとの星空を眺めながらよく考え込んだ。星っていったい幾つあるのだろうか？ あの星の向こうは、どこまで広がっているのだろうか？ 太陽なんて星くずの一つに過ぎないし、それを巡る小さな惑星の一点で、自分は宇宙を眺めている。果てしない時間と空間の広がりの中で、今まさに生きている。寒さに震えながらも、次々に生まれる疑問と感傷に振り回されながら、ひたすら星空を眺めていた。

大学に入るまでは、新潟県の山村に疎開し、近くの県立高校に通いながら自然に埋もれるような生活をしてきた。多くの思い出の中でも、吹雪のあとの星空は、今でも震えるような驚きを生々しく蘇らせる。あれからも、アルプス山頂からの星空や、プラネタリウムの星空に驚きはしたものの、昔眺めた星空にはとてもかなわない。

星空に釘付けになってから、もう半世紀が過ぎようとしている。あの頃はビッグバンもなければ、DNAもなかった。宇宙観や生命観を自分なりに組み立てても、人生を意味付ける作業の素材が、今とは決定的に違っていた。もしあの頃ビッグバンを知っていたら、星空を見る目がどう違っただろうか。もしあの頃DNAの自己複製能力を知っていたら、生命に対する思いがどう変わったのだろうか。それを今、自分で試してみることは出来ない。

1995年の科学技術基本法の成立、1996年の科学技術基本計画の策定以来、科学技術立国の基本政策は確固たるものとなった。昨今の困難な財政状態の中でも、科学技術に関する予算は順調に増え続け、我が国の将来を支える太い柱となることが期待されている。産業を活性化して雇用を守り、国民の安全を守り、国の安定的発展を支えることが、科学技術の至上命令ともなりつつある。科学技術の評価に当たっても、単なる好奇心の満足よりは、国民・社会にどう役立つかがまず問われるようになってきた。実利のための科学技術である。

半世紀前に比べると、様々な家電製品が家中を埋め尽くし、自動車地域社会を変貌させ、そして情報技術が国境を越えて世界を一つにしようとしている。

自動車に乗るようになると、宇宙観が変わるだろうか？ テレビが家庭に入ると、生命観が変わるだろうか？ おそらく何も変わらないだろう。科学技術は、確実に生活を向上させ、産業を活性化させるが、個人の考え方、宇宙観、生命観、自然観、人間観、人生観、未来観等々、いわゆる「観」の形

成にほとんど影響がなかった。

オウムの悲しい事件がそれを如実に物語っている。科学技術のエリートと称された人々が、信じられないような「観」に惑わされている。彼らはおそらく、科学技術を学び、研究することと、自ら「観」を樹立することとは、無関係と思っていたに違いない。

筆者は機械工学の専門家として過ごしてきたが、自分の知識や経験は、世過ぎ口過ぎの手段と思ってきた気配が濃厚である。今研究の現役から退こうとしているとき、その誤りを強く意識するようになってきた。

自分自身の“観”を探ってみると、その骨格が、科学や技術の煉瓦を使って組み立てられていることに改めて気付く。長年学び研究してきたことが、自分自身の“観”の中に、無意識のうちに沈殿してきたのであろう。

科学の教育においても、また科学技術の研究においても、その実利だけを追うことは空しいように思えてならない。科学が哲学の主要な柱であることは、ギリシャから始まって今なお連綿として生き続けているはずである。科学が高度に発達した現代こそ、また改めてその関連を強化しなければならない時代である。

これからの教育と研究において、「観」の形成、簡単に言えば人間形成に対する科学の役割を再認識する必要がある。本学のすべての領域の研究者が、その目的のために協力する場が「総合研究所」の中に生まれて来るようになれば、まさに「総合」が生きる瞬間である。